
あれからの日々 Day after tomorrow

真緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あれからの日々 Day after tomorrow

【Nコード】

N5717R

【作者名】

真緒

【あらすじ】

牢獄にいた俺はその日友達を探しにやってきた女の子アリスと出会った。

あれ日々

とある少年、桜井フリー（さくらい ふりー）16歳は牢獄に5年間入っている。理由は簡単、兄の秘密の計画を知ってしまったからである。

兄の名前は桜井利久（さくらい りく）。その日の夜はいつもより妙に暖かった。

EPISODE 1 運命の出会い！？

人にはレベルと能力と言うものがある。もちろん、能力がなくレベルがとても低い者もいる。

レベルを順番的に表すところ表される。

レベルA―（一般人並みの力。僧侶系能力者を示す）

レベルG―（一般人以上の力を持つ。）

レベルK―（無限の可能性があるとされているレベル。未だに謎が多い。そのため人数も少ない）

レベルS（―レベルGを軽々と越えるレベル。人数はAとGより少ないがKよりは多い）

レベルX―（この世で一番強いと言われるレベル。現代では10人もいないと言われている。一般人曰く化け物と呼ばれている）

1

「・・・にゃお」

ふとネコの声が聞こえた方を見るとそこには見た事もない女の子が

2

いる。

—「何？ネコちゃん」

その女の子は薄い茶色の髪の毛でショートヘア。

俺は監視の者かと思っていた。これまで何人もの監視官を見てきたか数え切れないほど見てきた。

女の子はネコを抱きこちらによつてきた。

” おいおい何ですか？もしかして処刑されんのか？ ”

と俺は思ったが女の子は聞いてきたただけだった。

—「あの一大丈夫ですか？」

—「・・・」

” どうせいつもの挑発か ” と俺は思った。

—「何か話して!!！」

女の子はネコを抱えたままこちらをガン見してくる。

俺は目をそらしたが、何故か女の子が視界に入ってしまう。

—「・・・大丈夫に見える？」

小声で話したがどうやら女の子は聞こえたよう言葉で返してきた。

—「見えません」

” だったら聞くなよ ” と思ったが言わなかった。

言ったら挑発に乗ってしまうかもしれないからだ。女の子は少し間を置いて俺の牢獄の鍵を開けた。

—「おい！開けて良いのか？」

—「どうして？」

女の子はすぐに言葉を返してきた。

—「お前、俺の監視に来たんじゃないのか？」

—「監視？私はここに潜入して友達の百合（ゆり）を助けに来ただけだよ？」

フリーは少し考え、その考えをまとめた。

” この子は監視官じゃなくただ友達を助けにきただけ ”

考えをまとめたはいいものの、そのせいで疑問も出て来た。

” なら何故俺を助ける ”

聞くしかないかと思ったが聞かずに俺は立ち去る事にした。
だけど、すぐに女の子が俺の行く道を遮ってくる。

—「・・・何？」

—「何か言う事があるんじゃない？」

—「・・・」

俺は話す事をやめた。

本当の事を言うと言ったのが久しぶりすぎて結構疲れるからだ。
だけど、それが徒となった。

ピシッ”と額にデコピンを食らった。

—「・・・めんどくせ」

—「めんどくせってなんですか?!」

女の子は少し起こり気味だったが続けて言う。

—「ありがとうくらい言っただけで欲しいな・・・」

—「・・・ありがとう」

俺は仕方下げで言った。

そのせいか女の子は再びデコピンを繰り返す。
ピシッ”

—「・・・」

呆れたように女の子を見た俺は振り返り再び牢獄を出ようとする。
スタスタと歩く俺を女の子が再び俺の肩を持ち遮った。

—「・・・今度は何だ？」

—「君の名前は？」

唐突に名前を聞かれた。

どうせ無視するとデコピンをもう一度くらうと思いき直に答える。

—「桜井 フリー」

—「フリーか・・・さて、本題に入ろう」

—「えっ？本題ってどうゆうことだ？」

次は何がくるのか疑問に思っただけで待ち構える。

—「・・・私のパートナーに強制任命します」

「七条 アリス — 15歳」

”・・・15歳だと?!俺と歳が変わらない?そんな子を俺は女の子と思っていたのか!!”

計算が狂ったとフリーは思っていた。そんな考えとは知らず、彼女は俺の歳を聞いてきた。

— 「フリーは何歳なの?」

— 「・・・」

— 「沈黙じゃわかんないよ!!もしかしてデコピンをくらいらいの?・・・マゾなの?」

— 「・・・マゾではない・・・歳は16」

— 「16歳?じゃあ歳はあまり変わらないね」

彼女は満面に笑みを俺に見せた。その笑顔をとて暖かく、不覚にも自分の姉と弟を思い出していた。

— 「・・・」

— 「どうしたの?」

沈黙していた俺を気遣ったのかアリスは言葉を発した。

”自分もその歳でこんな危ない所にまで友達捜しに来ているのに・

・この子は何故ここまで俺を気遣う?さっき知った奴だぞ?普通はパートナーなんかにしない筈だ。”

少し悩みながらもフリーは様子を見る事にした。

— 「・・・いや何でもない。で、七条の友達はどこにいるんだ?」

— 「七条?アリスで良いよ」

— 「いや、七条でいい」

俺はこれからも親しくなるわけではと思い、言い切った。

— 「それならいいけど。フリー最近誰か幽閉されてこなかった?」

— 「ここは能力を封じるための特殊な牢獄だ。その子は能力を持っていればここにいると思うけど?」

— 「ゆりは能力を持ってないと思う」

この時初めて俺は気づいた。友達がここにいない可能性もあることを・・・

” えつまさかここにいないんじゃないあ・・・その場合俺はこのまま彼女と一緒に友達が見つかるまで永遠とついていけないといけなくなるんじゃない?!”

最悪だと思ふ俺を彼女は気づいたのか俺の肩をポンポンと叩きながら言った。

— 「これからよろしくね」

彼女はグッジョブのサインを示してまた笑顔になった。

こうして、俺、フリーとアリスの長い長い友達探しと俺の目的のための旅が始まるうとしていた・・・

2

あれから二時間以上たった。俺は気がつけばアリスの友達の成田

ライクー（なりた らいく）18歳と

朱雀 栄一（さざく えいいち）18歳と知り合った。

何故いきなり二人と知り合ったかという話は長くなる。

簡単かつ早く言うところだ。二時間前にアリスが俺を連れて牢獄を抜け、町に出ていきなりタクシーに乗りだして、現在いるこの場所—（結構広い新築の酒場）に到着したのだ。

アリスは何故ここに来たのか分からなかったがとりあえずついていくところには二人の男とカウンターに綺麗な女の人がいた。

アリスが話をしていることからどうやらここにいる人はみんなアリスの知人みたいだと思った。

そして、アリスが俺のことを紹介したことから始まってこの状況に至った。

— 「単刀直入に聞くが、お前はアリスとどういった関係だ？」

朱雀は聞いた。朱雀はアリスのことが好きなのだ。

—「恋人です」

と言ったのはフリーではなく、いきなりフリーの後ろに隠れたライクだった。

さすがにこれはばれるだろと思う俺。

—「そうそう恋人・・・ってエエエエエエエエエエエエー!!」

アリスはライクのことに気づいていないようだ。

—「違う!!後ろの人が言っただけ!!」

と言ったが俺が指を刺したときはもう後ろにいなかった。

俺は誤解を解こうと必死に説得するが誰も耳をかさない。

—「俺が何か?」

—「あんただろう!!さっき言ったの!!」

—「じゃないのか?」

表情を一切変えずライクは普通に聞いてきた。

—「違うよライク!!フリーは私のパートナーなだけだよ!!」

アリスも俺の必死さに気づいたのか説明してくれた。

そう言ったことで俺はどうやらこの人たちの仲間になったらしい。

続く・・・

あとがき。

えっとはじめまして、真緒です・・・この作品を呼んでいただいた方、感謝の気持ちがいっぱいです。

どうぞこの小説をこれからもよろしくお願いします。
以上、真緒でした。W

あれ日々(後書き)

はじめまして。真緒です。

この小説を読んでいただいた方、ありがとうございます。感謝の気持ちがいっぱいです。これからも是非この小説をお願いします。以上真緒でした^W^

あれ日々2

この物語の主人公、いや、主人公の一人である桜井 フリーは悩んでいた。
会って間もない、七条 アリスや成田 ライクや朱雀 栄市にこんなすぐに馴染むものかと言う事を。

EPISODE 2

チーム センメイ

1

話を聞いたところによると、一応彼らは大きな団体チームを作っているらしい。

「ふーん。まだねえ」

ライクは疑った顔をして俺の顔をのぞき込むようにみた。
俺は一瞬冷やっとした。

「なんですか？」

「いや何でも無い。質問を続けるよ」

俺はコクリとうなずくとライクは話を続けた。

「君の能力は？」

「・・・未だに謎があるけど、俺はこう言っている。 ゼロタイム」

「そうか。牢獄にいたとアリスから聞いたがその理由は？」

ライクは俺の表情を気にせず聞いた来る。

「言いたくない」

「じゃあ次。君の過去に何があった？」

「言いたくない」

「じゃあ次。君に兄弟はいるか？」

ライクは続けて聞き続ける。

「兄が一人いる。弟と姉がいた」

「そうか。質問は以上だ」

ライクはいたという事を理解したのかそれ以上の事は何も聞かなかった。

そう、俺の忌まわしい過去。

そんな事を俺が考えているとは知らずアリスは問い詰めてくる。

「ねえ！どうして隠してたのレベルXってこと！？」

「・・・隠していた訳じゃない。聞かれなかったから答えなかっただけ」

「確かにそうだけど・・・でもすごいよねライク！10人もいないって言われているレベルXがこの団体に2人もいるんだよ！！すごいよ」

アリスは俺に変わってライクに語りかけた。

「2人？」　俺は疑問に思っアリスに聞く。

「七条。2人つて事はもう1人は誰だ？」

「誰って目の前にいるじゃない？」

うっ？とした顔で俺の前にはアリス。まさかとは思うが聞いてみた。

「お前か?!！」

「違う!!ライクだよ!!！」

”ライクは斜め前だが・・・”と突っ込みたかったがよした。ただ、あの人がレベルXとはさすがこの団体のリーダー的存在だなっと思う。

「よろしく。フリー」

「よろしく」

2人は手を繋ぐと朱雀が話しによってきた。

「レベルXだったって本当か!？」

「ライクが言うなら本当だよ朱雀」

「・・・こそ。俺より強い奴がまた1人と・・・」

アリスはドンマイと言うとすぐにアリスに泣き込んだ朱雀。

この人のイメージカラーは茶色か??と言う疑問がまた沸いた。

「ああそうだ。忘れていた、蓮からまた新しい情報が入ったぞアリス」

「ええ?!！」

「ちようど良い。フリーと行ってこいよ。どうやらデルレクス城に監禁されてるようだ。行き方知ってるよな??」

「うん。一回行った事あるから分かると思う」

”俺もですか?”と言う衝動に押されながらも俺はギリギリ話について行けた。

デルレクス城は俺が捕まっていた牢獄に本当に近いからだ。

アリスはこちらを向いて言った。

「さて、フリー行こうか」

「・・・分かった」

俺は仕方なく承知した。

これから合う強敵がいるとは知らずに。

2

酒場から少し歩いた。町に出てアリスは再びタクシーを拾おうとしている。

”こいつバカか”と思う俺だがここは素直に従っておこうと思った。絡むと話が長くなるからだ。

「フリーもうちよつと待ってね。タクシー来ると思うから」

「・・・ああ」

俺はすぐに来ないと思ったが数分たった後俺は呆然として今の状況を見ていた。

「早く乗ってフリー」

そこにはタクシーとそのタクシーに乗っているアリスの姿があった。

” 本当に来た ” 思った瞬間アリスは俺の手を取って瞬時にタクシーに乗った。

車が走る中、外は雨がポツリとパラパラだが降ってきた。

そんな中、町を歩いている黒服で黒髪の男と目が合った。

男はニヤツとした顔で俺を見ていたが、車が走っているので当然途中で見えなくなった。

だが、何故だろう。”こいつとはまた合いそう”と俺は少し思った。「もうすぐで着くね」

「・・・そうだな」

「どうかした？」

「何でも亡い」

そんな素っ気ない話を続けてしていると俺は少し疑問に思った事を聞いた。

「七条のレベルは何だ？」

「私？私はレベルK」

レベルK、一（無限の可能性があるとされているレベル。未だに謎が多い。そのため人数も少ない）
と言われているレベルだ。

” 確かにこいつならあっているかもな ” と俺は思う。
すると、運転士が言った。

「着きましたよ。デルレクス城前です」

「ありがとうございます」

「代金はチームセンメイ宛でよろしいでしょうか？」

「うん」

” 結構有名なんだな ” ポツリと心の中でつぶやいた。

そうして俺はアリスに引つ張られるまま、門の前までやって来た。

「入ろうか」

「堂々と門から入って大丈夫なのか?!」

「大丈夫だよ。きつと・・・」

大丈夫なのか不安が積もる中俺とアリスは門を開けた。

しかし、門の前には立派な庭と立派な城がすぐそこにあった。

庭を歩くと城が段々と大きくなるのが分かる。そんな中アリスは大はしゃぎ。本当に大丈夫なのかとは思うがほっといた。

人っ子1人見当たらないと思う所、人を見つけたときに見当たらないわけがすぐに分かった。

その人は人を殺してた。

そして、男。詳しく言うと黒服、黒髪の。

「遅かったな〜」

男が口を開く。

「・・・何者だ？貴様」

「絶対やばいね。あの人」

俺は小声で” 七条少し黙っていてくれ ”と言った。

「俺は 天川 深紅（あまかわ しんく、ここにいる理由はお前を殺しに来たって言えば分かるかな？桜井フリー」

「何故俺の名前を知っている？」

「利久の使いと言えば分かるかな？」

利久とはフリーの兄さん、桜井 利久の事だ。

「そうか。貴様はあいつの仲間か、さて、俺の計画の第一歩となってもらうぞ」

アリスはフリーに？を浮かべた。

「大丈夫。こいつは俺にようがあるようだから、先に友達捜しに行つてくれ。俺もすぐに行く」

「分かった。フリー死んじゃ駄目だよ？」

俺はコクリとうなずく。ここからはアリスの為じゃない。俺自身の為に戦えると俺は思った。

「始めようか」

「そうだな」

俺はすぐにこう言った。

「零 時間」

バシユーン バキツ

俺は空間を割り、割った空間に手を入れ自分が愛用していた大剣を取った。

「つてでけえな！」

「利久の事を吐いてもらうぞ」

「そう簡単にいくかな？」

俺は大きく振りかぶり、足をバネにしてスピードよく深紅に切りか

かった。

深紅は避けずに攻撃しようとしてきた。

大剣を振りかざし深紅に命中。

「死んだか？」

「死んでると思うか？こんな攻撃くらいで」

深紅は無傷で立っていた。

よく見ると深紅の両手が鋼色になっていた。

「それがお前の能力か」

「頭よくて助かる。そう、これが俺の能力。全身を鉄と炭素化、金と銅に出来るだよな。だからそんなの当たっても痛くないのよ」

「レベルはSといった所か」

「正解」

俺は心の中で突っ込んでいた。

”まるでこいつは鋼の錬金。ピー士のグピードじゃないか”と。

「おいおい何黙りこんでんだよ」

「お前ここに何しに来た？」

「だから、さつきも言っただろ。お前を殺しに来た。まっホントの所逃げて来たただけだな」

深紅は笑って言った。

「逃げてきた？利久からか？」

「違う。この前の仕事の最中に襲ってきた奴からだ」

「奴とは？」

「おつとお話はここまでだ。さつきの続きと行きますか」

俺は疑問に思った。これほどの奴なのに何故逃げる？そんなに強いのか？と言う疑問が。

俺は再び弱く握っていた大剣を強く握りしめ治す。

「さて始めよ・・・危ね！！もう来やがったのか」

深紅は瞬発的に後ろへ下がり上から飛んできた炎を避けた。

「・・・」

深紅が言っていた奴はフードを被っていて顔が全く見えない。

「俺もついてるよな。一度に利久の裏切り者と弟を始末できるなんてな」

「裏切り者?!」

「そうだ。こいつは3年前に利久から逃げた男だ」

「逃げた?!何故?」

俺は聞く事を選んだ。

「そんなの簡単。こいつもお前と一緒に、最初は利久の本当の計画を知らなくてその計画を知ってしまった。そして、牢獄行き、途中で逃げた。それだけだ」

フードの男は右手に炎をたくし上げた。

男は炎を飛ばすと深紅は受け止めずすぐさま避ける。

「なるほど。お前の弱点は炎か」

「ちつご名答。相性最悪だぜ」

「百 火 撲 滅 (ひやつかぼくめつ)」

フードが言うのと炎が彼の周りに上がる。腰にあった刀を抜くと、すぐに深紅の元へ向かう。

ヒヤキーン

刀と深紅の鉄の右手が火花を上げた。

しかし、フードは深紅の右手をひび割れさせた。

「さすがわ。利久が恐れる事はあるな、刀龍かたなりゅう」

俺は呆然と見ていたが聞く。

「刀龍?」

「お前知らないのか?町では結構噂になってるぞ?刀を龍のように使う男がいると。それがこいつだ」

「・・・」

フードは刀をもう一度振るう。深紅は保険のため胴体を鉄に変えた。ビヤキバキという音と共に深紅の胴体が悲鳴を上げる。

「刀で鉄の胴体を切るってマジでスげえなお前」

と言っている深紅だがすぐに体を捻り刀をひるませる。

「もらった」

「ふっ」

深紅は左手をフードに突き刺そうとしたがフードは右手で刀を持ち左手は炎を集中させていた。

「炎甲蕊えんこうずい」

左手を地面にたたきつける。その瞬間、地面から炎の壁が深紅左手を燃やした。

「ぐああああああああああ」

俺は思った。

” 確かに相性の問題でもあるが、この人はかなり強い ”

その結果深紅はやられていると結論付いた。

しかし、そう思ったのも束の間。深紅の増援がやってきた。

「・・・増援に来た」

そこにいたのは黒髪の美少女、まさに大和撫子と言って良い位の美少女だ。

「はあああおう助かるぜ」

いつの間にか炎は凍りに変化していた。

それで彼女は分かる。凍りの能力者だ。だが炎を凍りに変えたのは何かトリックがありそうだ。凍りは炎に弱いはずと思った。

「こっちは私がやるから・・・お前そっち」

「ちっ・・・しゃあねえな」

どうやら俺の相手は鉄男の深紅のようだ。

「知らない間に協力しているみたいになってるが、今は戦う事だけに集中しよう。話は後でいいか？」

俺がそう言うとフードは素直に頷き刀を握った。

「ジュウル、そっちはかなりのやり手だ気をつける」

ジュウルというのは俺がさっき言った大和撫子の彼女の名前だ。

「・・・了解・・・」

「・・・」

フードとジュウルは刀を握り向き合った。

そのころ俺と深紅は話し合いが始まっていた。

「どうやら、さっきの奴の奴のレベルはXっぽいな」

「・・・そうだな、かなり強かったしな」

「さて、お前を殺るときがきたようだ」

深紅は再び両手を鉄に再構築させ、拳を強く握る。

俺も負ける気はない。大剣を力いっぱい握りしめ大きく斬りかかった。

だけど、深紅は再び両手で受け止め、反撃を開始する。

深紅は俺の大剣を両手で跳ね返し、俺がひるんでいる隙に刺しかかってきた。

深紅の左手は交わせたが二回目の右手は俺の肋に突き刺さった。

「グハッ！」

「まず一発目」

口の中に血が大量にたまっていくのが分かる。

俺は血を吐いてこう言った。

「零 時間」

「おいおい。次は何を出そうと言うのだ？」

空間が再び割れる。しかし、さっきの大きさは大分違う、さっきの十倍はあるほどの大きさだ。

深紅はビックリしたのか言ってきた。

「さっきの大きさは違いすぎねえか？」

辺りが薄暗くなり、黒い雲が割って入ってきた。

「零 爲断！！（ゼロ イタチ）」

薄暗くなっていたところから斬撃が何度も深紅に向かって飛ぶ。

深紅はその斬撃を受けとめたり避けたりしたが次の瞬間、深紅は斬撃を避ける事も受け止める事も出来ずもろに食らった。

「ガハッ！！」

彼は瞬時に脇腹を切り裂かれた。しかし、一発食らっただけで重傷を伴う攻撃を放った俺にもこの代償はあった。

俺も口から血を大量に吐き、少し息が出来ず苦しくなった。

「血管が切れたか・・・やっぱりまだ使いこなせていないのか？」

「ははは。どうやら今の攻撃をする事は自分にもダメージをあたえるって事のようだな」

”今ので大分俺もあいつも重傷を負ったようだ、あいつも動いてくるだろう” 俺はそう言葉にはしなかったが思っていた。

深紅は脇腹を右手で押さえたまま言った。

「さすがは、利久の弟って言うべきだな。だが、次で終わりにする」

深紅は続けていった。

「黄金の両腕（ゴーレムハンズ）」

そう言った途端に深紅の両腕は黄金色に輝く。

俺は恐怖しなかった、いや、恐怖というよりもその戦いが楽しかったとさえ思う。

3

俺たちが戦っている中フードとジュウルも戦っていた。

「百 火 撲 滅」

辺りから炎が燃え上がる。

「その炎見覚えがあるぞ・・・まさか・・・お前」

ジュウルはまるで豆鉄砲を食らったような顔つきで驚いていた。

だけど、炎は彼女の言っている事を遮るように激しく燃える。

彼女に向かって炎は何発も飛び跳ねる。しかし、軽々と彼女は避

ける。

「そして、その技・・・お前やはり・・・火那汰（かなた）じゃないのか？」

「・・・」

フードは沈黙を維持していた。

「私を忘れたとは言わせないぞ・・・私だ、椎名 智美（しいなともみ）だ」

ジュウルは偽名のようなだが、フードは沈黙をずっと維持している。

「忘れたのか？」

語りかけて来るように彼女は話す。

しかし、フードは刀を握った、彼女はそれに気づいたのか技を出してしまった。かつての友人かもしれない者に。

「散 凍（さん こう）」

散弾のように彼女の腕から飛び散るすどい凍りはフードに向かって突き進む。

彼女は途中でしまったと言う顔つきになったがもう止められない。

「炎甲蕊」

フードは再び炎の壁を作るが2、3発ほど炎の壁を突き破った。

一発はフードに直撃しフードが破れた。

彼女はやはりと言いたげな顔で言った。

「やっぱり 火那汰だったか・・・助かっていたか・・・よかった・・・」

椎名は再び語りかけて来る。それに答えたのか男は等々口を開いた。

「・・・お前には失望したぞ・・・お互い生きていた事は喜べるが、お前は知っているはずだ。今お前がいる団体が何をしようとしているかを」

「それは・・・」

「・・・しかし、会えた事は喜んでいる。俺は戦う気無しくしてしまった。今日はもう帰れ。しかし、次は見逃さない」

「・・・わかった。なら私もお前と同様、このグループを抜けよう」

「・・・そうか」

「私はお前について行く。それでいいか？」

「？何故俺についてくる？」

「そっそれは・・・」

火那汰は？を浮かべもつと気になった。

「なんだ？気になるじゃないか！」

「また、今度な」

椎名は話を強制的に終わらした。もう1人の主人公とヒロインが誕生した瞬間だった。

「なんだよそれ」

「でも、本当に驚いた。あの時私はお前が死んだと思っていたからな」

「・・・勝手に人を殺すな」

「でもホントすごいよ火那汰は。チームを逃がすために500人くらいの敵と戦ったなんて」

椎名はそう言った途端に二人の戦いは終わっていたのだ。

続く・・・

あれ日々2（後書き）

久しぶりです。真緒です。等々二人目の主人公の火那汰君が出て来ましたね^^

今回は火那汰と椎名の過去のお話と深紅とフリーの終戦です。

みなさん。どうぞこれからもよろしくお願いします。以上、真緒でした^^

Boys memories 少年の思い出（前書き）

歴史^{かこ}の話をしよう。

この話はちょうど12年くらい前の日本での大事件での話。後からつけられた名前は刀傷事件^{イレイワン}と名付けられた。

日本のある町で盗賊達が刀を持ち、町の人々を殺して金を奪っていく。そんな事件だった。もちろん、警察部隊^{コトデスロック}が動いたが敵の数が多く、歯が立たなかった。そして、盗賊達により、また一つの町が狙われた。その時の話。

Boys memories 少年の思い出

EPISODE 3 覚醒

する能力

1

ここは人盛りが多い町。名前はフェイスタウン。この町ではありとあらゆる有名なものが売られている事で有名だ。もちろん、その為、お金の動きも激しいわけだが。

ある日、いつも通りに、少年は刀を木に向かって振るっていた。少年が刀を振ると、木は切れて倒れてしまう。彼の名前は 炎藤火那汰^{えんどうかなた}。この町では彼の父、炎藤彼方^{えんどうかなた}の子供で有名だ。

彼の父は有名な侍だ。彼はたった一人で100人の敵を倒した事で有名なのだ。それからと言うもの、彼にはあだ名がついた。"虎霧^{とらぎり}"と。だが、この町の人は彼に感服し、恐れない。彼も彼で、他の町では恐れられて住みにくい"と言って現在ここに住んでいる。火那汰は父に剣術を学び、今は自己流を磨いていた所だ。(当時、火那汰は5歳)彼は父を超えと言って自分の技を磨いていたのだが、その日に大事件が起こってしまう.
それは、一人の悲鳴から始まったのだ。

「盗賊達が来たぞ!!早く逃げろ!」

一人の商人は言うが誰も信じない。

「はあく来るわけないだろ?盗賊?そんなの来てたらすぐに携帯電話の速報で分かるだろうが!」

「本当にこつちに来てるって！」

一人の商人は必死に訴えるが誰も信じない。いや、信じたくなかったのだ。

一昨日、隣町の全霊町ぜんれいちょうが襲われた。みんなはそれで恐怖しているのだ。

だが、その時はちゃんと携帯電話の速報にも、テレビのニュースにもなっている為、村人はみんな無事だったと聞かされている。その為、みんなは商人を信じなかった。

「じゃあ何故速報になってないんだ？」

「それは……わからない」

それが列記とした嘘だからだろうとみんなに攻められた商人は抵抗するも、嘘をついたと断定されて、何を言っても相手にされない。

そんな中、何台かの車がならしてやって来る。黒くて目立ちにくい車が何台も。

町のと真ん中に車が何台も止めり、やっと車から人が出てくる。出て来たのは、盗賊達だ。

みんなが盗賊を見て逃げ出すのを見て、盗賊の親玉が口を開いた。

「……やれ」

その言葉と共に、刀や銃を持った盗賊が無抵抗な人を惨殺していく。町は銃の音や人の喚き声でたくさんあふれている。

そんな中戦っている者もいた。

炎藤火那汰と彼の父である、炎藤彼方だ。

「みんな〜！俺たちが時間を稼ぐ！その内に逃げろ！」

「ああ〜！虎霧さんだわ！！虎霧さんが戦ってくれている！」

町のみんなは彼の父を見て頭を下げてみんな言われた通りに逃げていく。

「頭は下げないで！！早く逃げなさい！」

「助かりました、ありがとう」

彼の父は敵の殲滅を火那汰は人々を守る。そんな戦い型だった。

火那汰は盗賊に斬りかかれていた少女を何とかギリギリで守る。

刀を刀で守ったせいか手が痛む。だが、ここは引けない、そう思っ
て、体制を跳ね返し敵を倒す。

火那汰は笑顔で「大丈夫か？」と聞くと、少女は顔を赤らめて言う。

「……ありがとう」

「さつさと町から出るんだ」

「……分かった。一つ聞くぞ？お前の名前は？」

火那汰は「名乗る者じゃない、早くいけ」

そう言われて、少女は最後に言い直す。

「そうか……ならこの戦いが終わったら聞き直す。その代わりに、
私の名前を覚えておけ」

彼女は命令口調になりながらも言う。彼はそれに分かったとうなず
く。

そして、彼女の名前は……彼女の名前は。

「椎名智美だ」

そう言っただけで彼女は去っていく。火那汰に背中を向けて町の外へと。

火那汰はそれを見守ると、父の所へ向かう。

「親父殆どの人は逃げたよ」

報告をすると彼の父は、よくやった、さすがは俺の息子だと言って
盗賊達の正面に向かって言う。

「いい加減にしるよ！お前らみたいなのがいるから、世界は腐って
るとか言われるてるんだという事をいい加減気づけよ」

「はっはっは、俺たちはゴミってか？」

そう言っただけで現れたのはさつきやれつと命じた盗賊達のリーダーだ。

茶色いマントに赤く目立つ服。そして、最後に右腕に黒い でかこ
ったFという入れ墨。

「やってる事はそれ以下だけだな！」

「ちっ……やれ」

そして、それと同時に銃を構え出す盗賊達。盗賊のリーダーは笑い
出す。

「子供と一緒に死ねるんだ。感謝しろよお！……撃て！！！」

だが、笑っていたのは合計で三人いた、後の二人は・・・炎藤火那汰とその父である炎藤彼方だ。

銃弾が二人に向かって飛んでいくが二人は焦りを見せない。そして、^{かれ}彼方の口が開いた。

「その程度か」

ドツドツドツッ！ ドツドツドツドッ！

銃弾は炸裂する。しかし、この二人には銃弾はきかなかった。何故なら銃弾は真つ二つに切られ、誰に当たることなかったからだ。

だが、それに気づいた盗賊のリーダーは不機嫌になり、全員に総攻撃をするように命じる。銃を持っていた者は刀や太刀を抜く。その他は元々握っていた武器を取る。

善の刃と悪の刃が交わる。だが、圧倒的に善の刃が押している。誰が見てもそう思うだろう。

「おいおい！敵はふたりだろオが！一々俺を出させる気か？お前エら！？」

盗賊のリーダーはそう言うのと近くにいた仲間の胸ぐらを掴んで言う。

「どオなんだ！？アア！？」

「仲間に八つ当たりか？お前はリーダーに向いてないな」（精々こいつのレベルはG、能力がない俺達でも・・・）と思いつながら刀に力を入れ込む彼方。

「ああ？！よし、気分が変わった、お前ら見とけや、こいつは俺がやる」

そう言い張る盗賊のリーダー。分かりました！と返すその手下達を見て、火那汰に彼の父は言う。

「こいつはお前には荷が重すぎる、こいつは俺がやる、お前は下がつとけ」

「分かった」

すぐに了承すると共にかなり後ろで姿を見る火那汰。彼の父はそれを確かめると、もう一本あった刀を抜き宣言する。

「お前は人を殺めすぎた、よって、この俺がお前を殺す」

「ほオやってみるオ！」

盗賊のリーダーは右手に太刀を取り、抜く。それを見た彼方は前方に突っ込み、敵と刃を交えた。

金属音が鳴る。その後すぐにもう一太刀交わる。力の差は互角、だが、技術で言うとな彼の方が断然に上だった。そのせいか、盗賊のリーダーが刀を一度振ると彼方は3度振っている。

スピード、テクニクは彼方が勝っていた。

だが、火那汰とその父である彼方は忘れていた。敵は盗賊であることと敵は未知数であることを。

「やれえ！！！」

その号令と同時に後ろで見ていた手下どもが手に太刀や剣をもって突っ込んで来る。それに気づき、彼方はガードなどをするが、四方八方から来る攻撃範囲など見れるはずもなく、等々彼方の背中には太刀が貫通する。

「グフツ！・・・貴様・・・」

「はっはっは、お前なんか能力を使う気はこれっぽっちもねえんだよ！俺達は盗賊、一対一で戦う訳ねえだろっ！」

「お前え、能力者だったのか・・・」

すぐ後ろで我が子の声がする。”親父ー！！と叫んでいる声が響いているのだ。

彼方は刺された所を見てみると、背中から刺されており、刃が腹から出ている。今だ抜かれていない太刀を見た。

すると、盗賊のリーダーは怪我をしていて倒れ込んでいる彼方を蹴る。何発も何発も蹴り続けた。

「オラオラオラ！！さっきまでの気力はどオした！？」

「グフツ・・・黙れ！」

「親父に何しやがるんだあ！！！」

火那汰は我慢の限界が来たのか等々盗賊のリーダーに斬りに飛びかかった。

「餓鬼は死んでろオ！！！」

刀と太刀が交わるが彼の父と互角の力を持つ盗賊のリーダーに力で勝てるはずもなく、剣を振られ飛ばされる。そして、建物にぶつか

る。

そして、彼方に盗賊のリーダーは耳打ちした。

「その傷じゃア助からねエお前に一つ教えといてやるよ、こいつらのレベルはAとGの雑魚共だが、俺のレベルは遙か上のSだ」

そう言つて去ろうとした盗賊のリーダー。それを言葉で止めるように火那汰は立ち上がる。

そして、言葉を発する。

「どこに行く？お前の相手はここにいるぞ！？」

「良いか？よく聞け餓鬼！俺は明日もここに来る！逃げたきや逃げろ！だが、俺は必ずここに来る。それだけ覚えとけエ！？いいな！」
そう言つて車に乗り込む盗賊達、彼なりに彼の父を感服したのだからと後で少し思った。

盗賊達が去つていくと火那汰はすぐに父の元へ行く。

「大丈夫か親父！？」

「ああ．．．この傷じゃもう駄目だ．．．すまない．．．お前を一人にしてしまう．．．咲良との約束を破ってしまうとは．．．俺は！ガハッ！ガハッ！」

「もう喋るな！今医者を！ハッ？」

考えたら分かることを忘れていた。町は盗賊達が来たおかげで村人は逃げてしまっている。もちろん医者ももうこの町にはいないだろう。その事を忘れていたのだ。

「そういうことだ．．．火那汰、よく聞くんた、お前は俺と咲良の子だ、人を信じろ、そうすれば、人はお前を信じてくれる、俺は死ぬがお前は人を助ける為に生きる、ガハッ！、この町から出る、あいつと戦うんじゃない。お前では勝てなグフツ！」

火那汰はいつの間にか涙を流していた。だが、話を聞き続ける。

「いいか？お前は人の為に強くなれ、それがお前の使命だ．．．後は・任せた．．．ぞ．．．」

炎藤彼方はその後口を開かなくなり、やがて死亡した。男の中の男の死だった。火那汰の中で一つのものが生まれようとしていた。大きなものが。

そして、彼はここに誓う。強くなることと盗賊達を殺すことを。

そうしてる内に一台の白い車がこちらに来る、火那汰は盗賊達が戻って来たのかと思い、納めていた刀を再び抜く。

だが車の扉を開けると、出て来たのは盗賊達では無く、さつき火那汰が助けた少女だった。

「お前は！さつき俺が助けた」

「椎名智美だ、名前くらい覚えろ」

車に乗っていたのは少女と少年が二人とおじさんが一人、後はおばあさんが一人だ。

「虎霧さん・・・」

車に乗っていたおじさんとおばあさんが彼の父を見つけた。無残にも後ろから刺された後がまだ残っている。

火那汰は親父の背中から刀を抜き、その刀を地面に突き刺した。その後、穴を堀、親父の死体を埋めた。石に名前を書き込んで、親父が持っていた2本の刀を墓の前に突き刺した。そして、その場にいる全員で手を合わせてさよならをした。決別として。

気づけば当たりは暗くもう夜だった。火那汰は今日合ったあつた事をおじさんらに話す。

「お前も一緒に逃げよう」

そう言い出したのは椎名だった。その後続くようにおじさんが口を開く。

「そつだ。虎霧さんの命を無駄にするんじゃない、わしらと一緒に逃げよう」

「そつだよ。私は何度か虎霧さんの世話になっっているんだ。見過ごすわけにはいかない」

おばあさんも続けて言った。火那汰はこの場だけでは、納得したように言う。

「分かった」
だが、彼の意志は固く、鋼よりも硬く、父に誓ったのだ。強くなる
ことと盗賊達をみんな殺すことを。
そして、その日はもうくらのいで車の中にあつた非常用ごはんを食
べて眠つた。

次の日・・・

最初に起きたのは椎名だつた。
椎名は起き上がると周りを見た。まだ、誰も起きてない、それを知
ると火那汰の元に行く。”そお言えば名前聞いてなかつたな”と思
つておきたら聞こうと思つた。
椎名は火那汰の唇を見た。ペトペトした唇。その事が頭から離れな
かつた。”ちよつと待て、私はこいつが好きなのか？どおなんだ”
と考えていると、火那汰から物音がした。火那汰が起きたのだ。椎
名は急いで寝たふりをする。
そして、火那汰は起きて、どこかへ行く。椎名はそれを見て火那汰
にばれないようについて行つた。
彼の行つた場所は・・・昨日彼が作つた彼の父である炎藤彼方の
墓であつた。

彼はまるで親父がそこにいるように話しかける。
「なあ親父、親父の言いつけを一つ破るが許してくれるよな？・・・
親父、あんたの信じた人達はみんな優しい人だ、あんたの言う守る
べき人なんだろ？」

何度も言うが火那汰は父の墓の前でまるで父がそこにいるかのよう
に話している。

「じゃあな、そろそろ行つてくる」
そう言つて彼は後ろを振り返る、すると、後ろにいた椎名と目があ

った。椎名は隠れたが確実にばれている。

火那汰はそれを知っていてあえて何も見なかったようにその場を去っていった。

「・・・あいつ」

椎名は思っていた。彼は何かを隠している。彼の父の約束を破る何かを、すると、言葉を繋ぎ合わせてみると分かった。

火那汰から聞いた話によると、あいつとは戦うな、あんたの言う守るべき人なんだろ？、そして、最後の一つ言いつけを破る。このことから読み取ると彼は盗賊と戦い私達を守るといふ答えが出て来たのだ。椎名はその事を早くおばさん達に伝えないと思いきり走ろうとするが、後ろから強い打撃を受けた。

後ろを振り向くと・・・

「な・・・に？お前は」

後ろにいたのは炎藤火那汰本人だった。

「悪いけど、君達の誰かを死なせるつもりはないんだ」

「やはり・・・お前の名前は・・・？」

すると彼はこう答えた。

「炎藤 火那汰」

椎名の意識が薄れていく。段々視線が暗くなっていく。・・・その後火那汰は椎名を担いで、みんなのいる車に向かった。おばあさん達には椎名が倒れたと言い車に乗せ、早く行かせるように仕向けた。

車が出発する頃の盗賊達の車が昨日の倍以上でやって来た。

「車を出しとくれ！」

おばあさんが運転しているおじさんに言ったが、次に口を開いたのはおじさんではなく、火那汰だった。

「このまま逃げても確実に殺される。俺が残って時間を稼ぐ、そのうちに逃げてください」

「それじゃあ君は死ぬ気なのか？」

「死ぬ気はありません。それでは」

そう言つて火那汰は車を出たがおばあさんが追いかけてよとしたので少年達に止めさせた。その短時間で盗賊達の車はすぐ近くまで来ている。

「早く行つてください！」

その後車が動く音がした、火那汰はその後一度も振り返らなかつたが声が聞こえた。彼を呼ぶあの少女の声が、気を失っていた筈の少女の声だ。

彼は刀を握り抜く、誓つた言葉を胸に彼は戦いを始める。後にこれが彼の能力の発生のきつかけとなつた事など誰も知らないだろ。

刀を握り締めてもう数時間、100人以上は斬つた。だが、敵はまだウヨウヨいる。地面に刺した刀を抜く。すると、盗賊のリーダーが等々出て来た。

「よお餓鬼！」

「貴様あ！」

「中々耐えるじゃねえじゃ、どうだ、俺達の仲間に入らねえか？」
「はあ？」と返す火那汰。盗賊のリーダーは言う。

「悪い話じゃねえだろ？お前はここで生き残り、さっきの者達も救われる」

「そうだな・・・だが断る！俺は親父に誓つた、お前ら全員ぶつ殺すつてな！！！！」

「はあ〜世話の焼ける餓鬼だぜ・・・まったく・・・殺せ」

敵の総大将である盗賊のリーダーがそう言つと数百もいた盗賊達が火那汰を攻撃しようとして突つ込んで来る。火那汰は刀を振るい応戦するが父と同じく四方八方は見れない。そう考えた火那汰は一点に集中して攻撃を仕掛け、そのまま前に進む。狙いはもちろん盗賊のリーダーだ。

「この餓鬼、頭を狙つてッ！」

「頭ア！後ろです。後ろ！！」

「ああ？」

盗賊のリーダーは後ろを振り向くとそこにはもうあの少年が居た。

火那汰は刀を握り締めて再び誓う。絶対に強くなる事と盗賊達を全員殺すことを父に、いや自分に誓う。

「遅い！」

火那汰は斬りに飛びかかった。火那汰の振り切った刀の先が盗賊のリーダーの目を切りつける。

盗賊のリーダーの目から大量の血が噴出した。盗賊のリーダーは右手で右目を押さえながら叫んだ。

「うがアアアアアアああアアアアああああああアアあああああー！」

「とどめだあああ！」

そう言つて時の総大将が目を押さえている所を火那汰は刀を振るおうとして追い打ちをかけようとしたが相手も黙っているわけではなく。

「調子に乗るなよ餓鬼ツイイ！」

敵が怒り出した瞬間に刀で切ろうとした火那汰は敵の攻撃を受けた。盗賊のリーダーだ。

だが、相手はひるんでいて動けない筈、火那汰はもう一度盗賊のリーダーを見た。

だが、何も無い。どう言うことだと火那汰は思ったが相手がわざわざ手をばらしてきた。

「ビックリしたたる？そりゃそうたるおな！なんてっただって能力を使つたしなア！」

能力については火那汰は色々な事を彼の父から聞いていたため能力の事は知っている。

しかし、火那汰にはこの時能力はない。その為かレベルは暫定Gである。

「お前能力者だったのか！」

「当たり前だろオ！くそ餓鬼イ！俺のレベルはSだぞ？！なめてんじゃねえぞ！」

レベルS、レベルGを遙かに超えたレベル。

暫定レベルG無能力者である火那汰が勝てる相手では無かった。だが、彼は諦めない。相手がどんな能力を持っていても彼は諦めない。「行くぜ餓鬼ッ！」

そう言っただけで走り出したのは敵の総大将。刀を持たず、拳で突っ込んできた。火那汰は刀を捨てず、刀で応戦するが今までの剣筋はすべて避けられている。当たったのはたった一発、さつき相手の目を一つ潰した時だけだ。

刀を避けられひるんだ火那汰を見て敵の総大将は仕掛けてくる。右拳に力を入れ、腹を思いつきり殴って来た。そして、直撃。

「ダメージ拡散^{メイジス}」

総大将がそう言っただけでさつきまでのダメージがいきなりふくれあがる。そのダメージにより火那汰は倒れ込むと敵は笑って言った。

「痛テエだろ！」

だが、火那汰は今何が起こったか分かっていない。それもその筈。能力者と戦って来たのはこれが初めてなのだから。火那汰に残っているのはダメージと意志だけだ。それでも彼は立ち上がるうとする。それを見て元々機嫌が悪かった敵の総大将は手も着いて倒れ込んでいる火那汰をまるで昨日の父親と同様に蹴ってくる。

「お前なんか俺達の計画が狂ってたまるかよ！」

バシバシ蹴られても火那汰は尚立ち上がるうとする。彼は諦めない。自分自身の為に。

そして、等々彼は言葉を発した。

「ふざけるな・・・ふざけんなアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「!!!!!!」

ヴァッシュン！！と言う音がし、彼の体から炎が燃えだした。

「なッ！何だそれッ？ハハハ楽しくなってきたじゃねエか！」

そんな笑っている総大将を見て覚醒した火那汰は右手を向け大量の炎を向けた。敵の総大将は笑っている途中で燃え尽きた。最後はあつけない死に方だった。

それを見ていたのか盗賊達は燃え上がる火那汰を見て逃げ出し、一

人はこう言った。

「レベルX（化け物）の誕生だ」と。

そんな逃げ惑う盗賊達を火那汰は笑って殺し出す。虐殺が始まりバラバラになるまで焼く。たすけをこう者もいたがもちろん彼は無視して焼き殺した。

数時間後、そこには灰と化した人間の姿がウジャウジャと転がり、普通に生きていたのは火那汰だけだった。だが、彼も初めて能力を使うのにたいして、こんなに使ったのだから、疲労感は死ぬほどあった。火那汰は地面に刀を刺して立とうもするも、刀は人間を斬りすぎて痛んでいたせいか折れてしまう。

その為、火那汰は地面に倒れ込んだ。意識はある。しかし、このままでは完全に死んでしまっただろう。そんな中、戦場に一人の男がやって来た。

男はロープを被り顔が見えない。そして、火那汰に近づいてくる。火那汰は疲労感の為に動けないが男の姿を見ていた。警戒しているのだ。

やがて、男は火那汰に話し書けてきた。ロープを取り、顔を見せてくる。男は黒髪的美男子だった。

「これは君がやったのか？」

微笑みながら5歳児に話しかける男。火那汰は表情を変えず言う。

「そうだ、俺がやった。だからどうした」

「君は何歳だ？君の名前は」

「炎藤火那汰、5歳」

男はそれを聞くとにやつきが止まらなかった。それを見て火那汰は不気味に思えて仕方なかった。

男は話をする。

「すごい。敵の数は300...いや500はいる」

褒めてもらえたことは嬉しかったが火那汰は警戒を解かなかった。

相手は凄まじいオーラを出していたのだ。それを火那汰は感じ取

っていた。

「それで、俺に何のようだ」

「うーん。本当はね、見に来てただけなんだけど君が倒してしまっ
たからね・・・計画がくるっただよ、どうしようかな・・・君死
にかけて居るね？」

「・・・それがどうした？」

「助けてあげようか？ただし条件付きだけど」

「・・・条件を言え」

男は少し考えると、何かを思いついたような反応をしことばを発し
た。

「私の計画を手伝ってもらおう」

「・・・わか・・・った」

段々と意識がなくなっていく中で彼が次に気がついたのは屋敷の中
だった。もちろん、契約者の屋敷だ

「はっ？」

目が覚めると、契約者の男がそこにいた。

「目が覚めまたか」

「お前、ローブのグッ！」

火那汰は頭に手をやる。それを見て契約者は何かの説明を شدした。
「それはそうだろうね。もうちょっと休んだ方が良く。初めて能力
を使うことに対して無理をしすぎたんだ。脳ダメージも行ったのだ
ろう。」

「グッ！・・・お前、名前は？」

「えっ？俺？俺は桜井利久（さくらい りく）」

これが火那汰と利久の繋がりだった。

フリーと深紅は次の一撃で決めようとしていた。お互いダメージの量も限度を超えているからだ。

「ゼロタイム
零時間」

「ゴレムハンズ
黄金の両腕」

深紅は消えかかっていた能力を再発動し、フリーもそれに応じた。二人は同時に技を出し合った後正面からぶつかる。

「ゼロイタチ
零為断」

「黄金の両腕！」

風を斬り、二つの技がぶつかる。力はフリーが大分押している、さすがはレベルXと言えるだろうが、フリーの放った斬撃は深紅の右手に反射し深紅の左腕の方に吹き飛んだ。その為、深紅の左手は無くなったものの、フリーは黄金の右手に顔面にもろでくらった。この時に勝負は決した。レベルSが偶然にもレベルXを破ったのだ。フリーはそのまま気を失い、深紅は殺さずに左腕の修復をした。そして、彼はこう言った。

「偶然とは怖いな。だが、今回は俺の勝ちだ、また会おう」
そう言つて彼は左腕を修復させた後にジュウルの元に向かった。

だが、深紅はジュウルを見てびっくりした。

「ジュウル。貴様裏切ったな！」

「私が組織に残る理由がない、むしろ抜けた方が好都合な事ができた」

「ちつ。ただですむと思うなよ！ジュウル！」

ジュウル事椎名智美は敵に寝返ったなの。深紅はそれを言って去っていく。深追いはしなかった。

.....

深紅は大急ぎで利久のいる基地に帰って行く途中に考え込んでいた。利久にどう説明するかを。

深紅が本当にここに来た理由は桜井フリーの殺害ではない。ましてや、炎藤火那汰の殺害でもない。本当の目的は第一プランと第二プランの成長をはかるものだ。

そして、深紅はその成果について考えて居たのだった。

Boys memories . . . 少年の思い出(後書き)

物語は続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5717r/>

あれからの日々 Day after tomorrow

2011年10月8日20時55分発行